

《もくじ》

- 特集:命にやさしい再生可能エネルギーに転換を ―小水力発電の“むらおこし”
- 2頁・ひろがる地産地消の小水力発電を往く……………上野 英雄 (正会員)
- 6頁・晩秋の小水力発電所見学の旅……………安孫子 誠也 (賛助会員)
- 7頁・自然のつながりの大切さ-3-11から学ぶこと……………小泉 武栄 (正会員)
- 11頁・会則抄録「河川を愛する人々の叡智を結集」

奔流

《第6号》

- 発行 千曲川・信濃川復権の会
- 〒184-0012 東京都小金井市中町2-5-13
- FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六 (共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎 (共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 (6)

確信にみちたメッセージ 森は海の恋人

―地球温暖化問題に重要な森・川・海の連環―

畠山 重篤 (牡蠣の森を慕う会代表)

美味しい牡蠣(フキ)が育つ海を守るには、その海に注ぐ川、そして流域の森の保全が必要なことになり、漁民による森づくりを始めて二十四年目を迎えた。名づけて「森は海の恋人」運動である。

牡蠣の漁場は、川が注ぐ海、汽水域である。牡蠣の餌になる植物プランクトンの発生に、川が運んでくる森の養分が不可欠だからだ。

河川を塞ぎ止める河口堰、ダムなどの建設、森林の荒廃が進むと、あつという間に海の生産力が落ちてゆく姿を数多く見てきた。しかし、学究、行政の縦割思考は、自然をそのような形でとらえていない。



全国の沿岸の海は荒廃するばかりであった。その波は三陸気仙沼湾にも押し寄せ、青い海は赤潮の海に変貌していった。その上、こともあろうに河口からわずか8キロ

メートル地点の大川に、新月ダム建設計画までが持ち上がったのである。

赤潮の海をなんとか青い海にとりもどしたい。そんな切なる願いから漁民による広葉樹の植林運動が源流域の室根山で行われたのであった。平成元(1989)年のことである。

よくぞ「森は海の恋人」と言ってくれたという賛辞の言葉がある反面、学者と行政からは冷やかな視線を集めた。科学的な根拠に欠ける、というのである。

平成2年、松永勝彦北海道大学水産学部教授と運命的な出会いがあった。沿岸域の生物生産の鍵をにぎる成分は鉄分であり、森から河川水を通して供給されているというのだ。

植物は、クロロフィル(光合成色素のひとつ)の生成にまず鉄分を必要とする。また、チソッやリンなどの吸収にも不可欠である。

河川や海は酸素で満ちている。そのため鉄分は酸化し、粒子となって沈下してしまう。故に海は極端な鉄分不足で、

海水1ℓ中わずか10億分の1グラムしか含まれていないという。

森林や湿地帯の中で生成されるフルボ酸という物質が土中の鉄イオンと結びつきフルボ酸鉄となる。この形の鉄分は酸化されないので海まで届き、植物に吸収される。

松永教授は、世界で初めてこのメカニズムを解明された分析化学者だったのである。その後、研究は大きく進み、平成23年、世界三大漁場三陸沖の生物生産に、ロシアと中国国境を流れるアムール川のフルボ酸鉄が関与していることが判明した。

海洋の植物プランクトン、海藻は光合成によつて二酸化炭素を固定する。地球温暖化問題からも森・川・海の連環が重要なのである。

千年に度と言われる巨大津波で、しばらく気仙沼湾舞根の海から生物が姿を消した。しかし、一ヶ月も経たないうちに海は回復した。背景の森と川が健全だったからである。森は海の恋人、このメッセージは確信である。

(気仙沼市在住・京都大学教授)
 *主な著書『森は海の恋人』、『鉄が地球温暖化を防ぐ』、『牡蠣礼賛』、『日本(汽水)紀行』、以上、文藝春秋社刊。
 *平成11年に「水郷水都全国会議気仙沼大会」開催。同13年、新月ダム計画中止。